Wood story

　このコーナーでは、木材に関する情報や、弊社での新たな取り組み、新商品の紹介などさまざまの情報をお届けしていきたいと思っています。
ご質問などございましたら気軽にお問い合わせください。

第一回
ツキ板とはどのようなものか？
ツキ板という言葉は、突いて削り出した板、ということであり、英語の Slice Venner(スライスド・ベニア)という言葉が最もよくあてはまる。
しかし、ツキ板という言葉はスライスド単板（平削単板 Sliced-Cat Venner）だけに限定されるかというと、決してそうとは言えない。スライスド単板は、家具や建築物の内装用装飾表面材、つまり化粧用として使われるところから化粧単板とも言われる。また、ロータリーで丸剥にした薄い板、（ロータリー単板 Rotary-cut Veneer）も化粧用としてつかわれるところからツキ板ということが多い。
ツキ板の歴史
　ツキ板を他の板類に貼り合わせることは、エジプト文明時代に当時の指導階級が、その手回品や家具・椅子などに用いたことが、ピラミッド内の遺品などに残っているといわれ、さらにバビロニア、アッシリア時代からギリシャ・ローマ時代においても王朝の家具、壁面などにツキ板貼りしたものが用いられている。
　中国では、紀元前からツキ板貼りの工芸品が作られており、わが国では奈良朝時代に工芸が発達し、ツキ板工芸品が作られ正倉院の宝物の中にツキ板貼りの手箱（太子の手筥・木画紫檀双六局）がみられ、今も当時の美しさを保っている。
　これらのツキ板貼りの手法は、初めは象嵌式の小形のものに限られていた。箱根細工などがこれに当たる。明治 34 年(1901)頃に贈り物の鶏卵箱として板紙に桐のツキ板を貼ったものがあり、この頃からツキ板もやや大きい形となってきた。
わが国で通称ベニヤ板と呼ばれる普通合板が初めて紹介されたのは、明治 27 年（1894）諏訪鹿三氏がシカゴ博覧会に出品されたベニヤ広板を持ち帰り、大日本山林総会に披露したときである。その後明治 40 年（1907）名古屋の浅野木工所の浅野吉次郎氏が 1.06 ㍍のロータリー機を完成し、ベニヤ板を作り始めたとされている。
　このように、スライスド単板はロータリー単板よりも早く作られたが、ロータリー機の完成によって幅の広いものができるようになったことが刺激となって、スライスド単板も順次大きなものが出来るようになった。普通合板はベニヤチェス(茶箱)を主体として発達してきたのに対し、スライスド単板、ツキ板は家具から発展してきた点が趣を異にしている。

参考資料　ツキ板ハンドブック(全天連)